あなたの畑、水田、採草地、家の周り、集落で獣害が発生する、被害がどんどん増えるってことは、あなた自身が動物に「ウン、ここは餌場に近いし安心、安全だからここに住もう」って思わせただけ。

あなたが気づいてない、見ようとしないから見えてないだけなんです。

つまり、安心できるひそみ場と餌を、あなた自身が準備してあげただけですよ。

これを「餌付け」って言う。納屋の奥にタヌキの安心できる空間を作ってあげたあなたは、きっと餌も準備してあげてる。

餌は毎日家の前の畑に捨てる生ごみ（ダイコンやニンジンの端っこ、果物の皮、茶殻、サンマの頭と骨、卵殻、古くなった糠みそなどなど）だったり、実っているのに採りもしないイチジク、カキ、ビワといった放任果樹だったり。

放任したカキの意味

それじゃさっそく、放任したカキの木一本使って、今までどれほど見えてるのに見てなかったのか、意味考えてなかったのか、ちょっと左の図を見ながら意味を考える練習してみて下さい。

図①が放任されて大木になっちゃったカキ、図②は島根県のあたしの近所の婦人会の母ちゃんたちが、獣害対策の勉強会で学んで栽培してる鳥獣を寄せ付けないカキ。

おばちゃんたちのカキ（図②）は冬に剪定、幼果の時に摘果、六月と八月に病害虫防除、秋に果実が色づいたらぜーんぶ収穫しておしまい。作業は全部脚立ナシの楽々作業。

これじゃ、鳥獣どころか病害虫も無縁ってこと。

じゃあ図①のカキ。

剪定しない樹木って、枝どうしが日光を奪い合ってどうしても大木になっちゃう。

そして、日光不足で伸びられない小枝が増える。

枝が込み合ったカキって、ヘタムシや円星落葉病が増える。

落葉病にかかったカキは八月から青いのに熟した果実がヘタ抜けして落ちる。ってことは、八月からイノシシもタヌキもテンも寄ってくる。

木は大きくなるから根っこも張る。地中にはセミの幼虫も増えてアナグマもくる。

果実が熟せばカラスもメジロも来るって。

八月から冬まで、ずっと鳥獣を寄せ続ける。もし畑にこんな木が一本あれば、矢印の幅だけは陰になって野菜とか作れない。

でも一番困るのは、食べた鳥獣がその付近の茂みでカキの種入りうんこをすること。

で、集落に誰も植えてないのにカキがどんどん増えていく。

こんなこと言われるまで、見えてるのに見えてこなかったあなたは、餌付け犯人ということ少しは見えてきたかしら。

次回は水田、守れる田んぼと守れない田んぼ。

同じ柵でも効く水田と効かない水田、効く柵と逆効果の柵の設置方法の違いは何だって話だよー。

図① 鳥獣害をすすめてしまう採らない柿

図② 鳥獣をよせつけない柿（生った果実は全部採る）

講師紹介 **井上（いのうえ） 雅央（まさてる）氏**

1949年、奈良県出身。
愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了、京都大学博士（農学）。
元 農研機構 近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長。
退職後、同センター専門員。宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動。
著書に、『これならできる獣害対策』『山の畑をサルから守る』『山と田畑をシカから守る』『60歳からの防除作業便利帳』『ハダニ』『女性がすればずんずん進む獣害対策』（いずれも農文協）など多数。